

乳歯の萌出を障害した集合性歯牙腫の1例

蓮 沼 一 郎 渡 辺 ヒロ子 田 口 洋
富 沢 美恵子 野 田 忠 福 島 祥 紘*

新潟大学歯学部小児歯科学教室

(主任：野田 忠教授)

*新潟大学歯学部口腔病理学教室

(主任：石木哲夫教授)

A Case of Compound Odontoma Causing Impaction of a Deciduous Tooth

Ichiro HASUNUMA, Hiroko WATANABE, Yo TAGUCHI,
Mieko TOMIZAWA, Tadashi NODA, Masahiro FUKUSHIMA*

Department of Pedodontics, School of Dentistry, Niigata University

(Chief: Prof. Tadashi NODA)

*Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Niigata University

(Chief: Prof. Tetsuo ISHIKI)

Key words: : 集合性歯牙腫／乳歯／上顎乳犬歯
／萌出障害／代生歯堤

緒 言

歯牙腫は、象牙質およびエナメル質を主体とする腫瘍状病変である。複雑型と集合型のうち、一般には集合型が多いとされている¹⁾。しかし10歳未満の小児に発生した集合性歯牙腫の報告は比較的少なく²⁾⁻¹³⁾、なかでも乳歯胚由来を想定した報告はあまり多くはない²⁾³⁾⁷⁾¹⁰⁾¹²⁾¹³⁾。

今回著者らは、4歳男児の上顎左側乳犬歯部に生じ、乳犬歯の萌出を障害した歯牙腫を経験したので、若干の知見とともに報告する。

症 例

- 1) 患児：土〇朗〇，男子
- 2) 生年月日：昭和57年7月30日
- 3) 初診：昭和61年10月20日（4歳2か月）
- 4) 主訴：上顎左側乳犬歯の未萌出と同部の膨

隆

5) 家族歴：特記事項なし

6) 既往歴：3歳時に川崎病に罹患したが、現在は寛解しており異常は認められない。なお1歳半頃、転倒し顔面に打撲を受けている。

7) 口腔内所見およびX線学的所見：上顎左側乳犬歯を除くすべての乳歯は、萌出を完了してお



図1 初診時口腔内所見

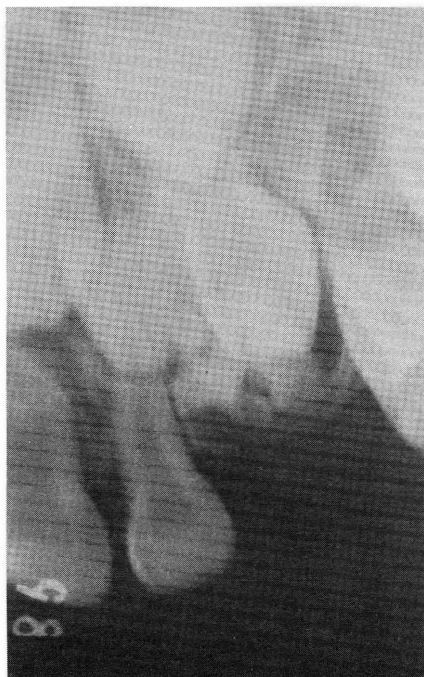


図2 初診時デンタルX線所見



図3 初診時オクルーガルX線所見

り齶蝕は認められなかった。上顎左側乳犬歯は未萌出で、同部の歯槽頂から歯肉頬移行部にかけて $8 \times 10\text{mm}$ の卵円形、骨様硬の膨隆を認めたが、色調は正常であった(図1)。

X線写真において、上顎左側乳側切歯の歯根遠心および永久側切歯の歯胚上方から、埋伏している乳犬歯の歯冠近心上方にかけて、大小5個以上の歯牙様不透過像が認められた(図2, 3)。

以上の所見から、歯牙腫と臨床診断し、昭和61年11月28日に摘出を行った。

手術所見

摘出は局所麻酔下で、上顎左側乳犬歯相当部の歯槽頂よりやや口蓋側に横切開を入れ、第一乳臼歯および乳側切歯の頬側歯肉に縦切開を加え、粘膜と骨膜の剥離を行った。歯槽頂部に卵円形の骨欠損が認められ、そこから薄い線維性被膜に覆われた歯牙腫が露出していた(図4)。歯牙腫周囲の骨を削除すると、歯牙腫深部から帯状の被膜様軟組織が伸びており、上顎左側乳犬歯の歯冠を触知

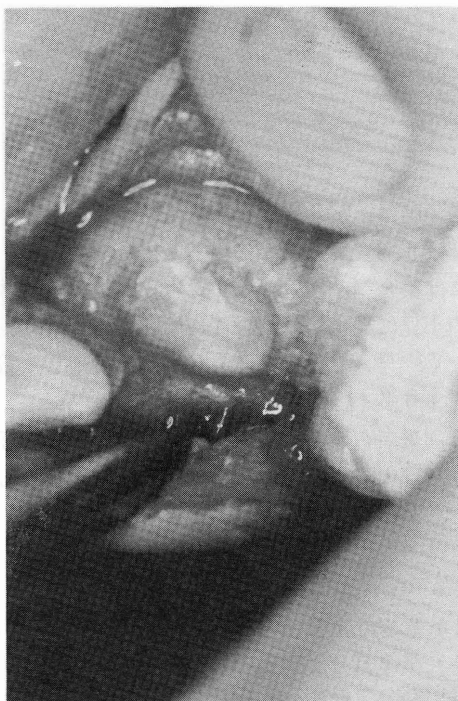


図4 摘出時の歯牙腫表面

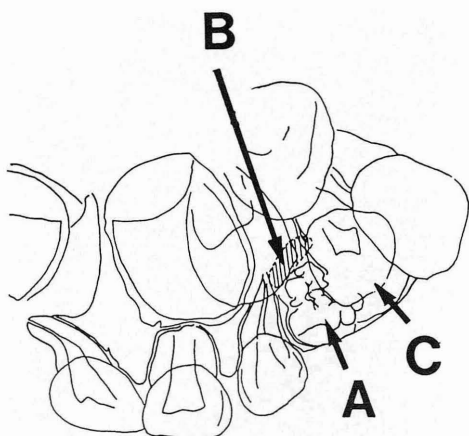


図5 摘出物の位置関係

- A: 歯牙腫
- B: 帯状の被膜様軟組織
- C: 上顎左側乳犬歯



図7 歯牙腫の軟X線所見

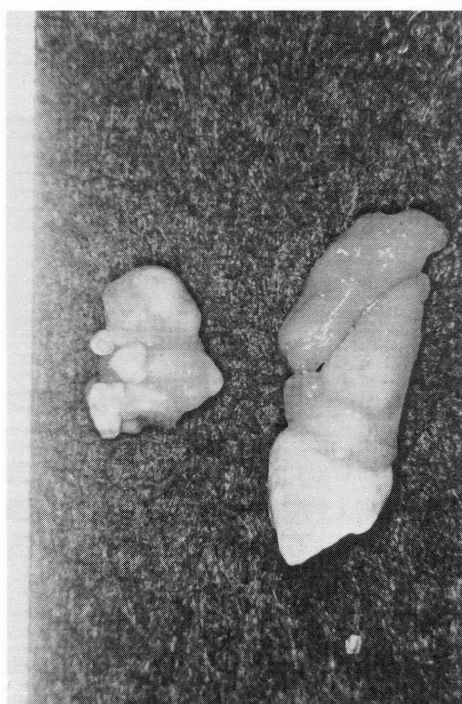


図6 摘出物肉眼所見

左が歯牙腫で、右は上顎左側乳犬歯と被膜様軟組織

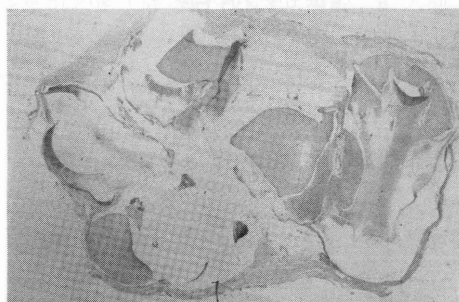


図8 H-E染色による歯牙腫全体像

3～4個の歯牙様構造物が存在する。

した。埋伏していた乳犬歯の歯冠を覆っていた被膜と歯牙腫を覆っていた被膜との境界は不明で、連続性が疑われたので(図5), 歯牙腫とともに乳犬歯も同時に摘出した。摘出時に一塊として取り出すことはできず, それぞれ単独に摘出した(図6)。

歯牙腫表面は薄い被膜に被われており, 大きさは約 6×10 mmであった。肉眼所見および軟X線所見(図7)から, 大小5～6個の石灰化物の集塊

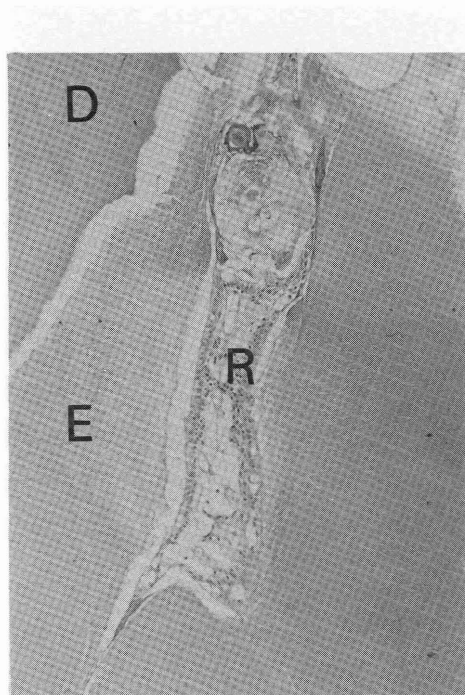


図9 エナメル基質が残存しており、石灰化において未成熟である。

R: 退縮エナメル上皮
E: エナメル質
D: 象牙質

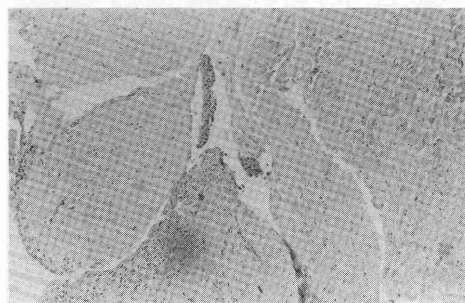


図10 帯状の被膜様軟組織
中央に退縮エナメル上皮が認められる。

であることが認められた。

病理組織学的所見

歯牙腫は線維性被膜に包まれており、3～4個の歯牙様構造物の集塊であった(図8)。各歯牙様

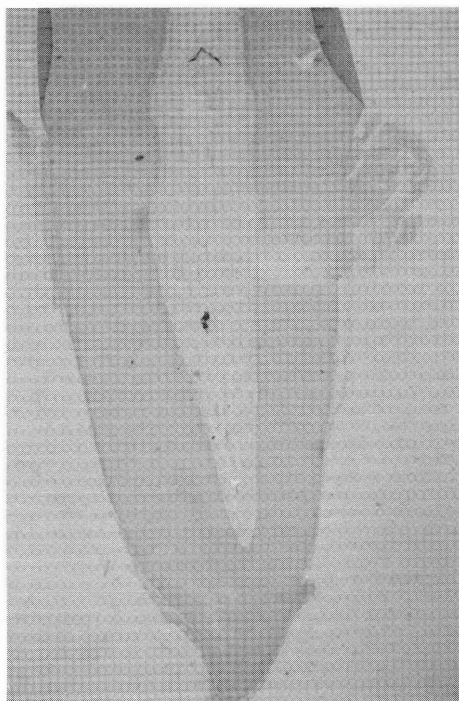


図11 上顎左側乳犬歯の全体像

構造物は、比較的幼若なエナメル質・象牙質・歯髄から成っており、セメント質の形成は認められなかった(図8, 9)。病理組織学的診断は集合性歯牙腫であった。

摘出した帯状の被膜様軟組織は、退縮エナメル上皮を含んだ健全な線維性の結合組織から成る歯小囊様組織であった(図10)。

摘出した乳犬歯の歯根は完成しており、歯髄も健全で、歯根の歯頸部寄りに翻転した歯小囊の一部が認められ(図11)、健全な線維性の結合組織であった(図12)。また、乳犬歯のエナメル質を覆う退縮エナメル上皮も、病的な像を示していなかった(図13)。

考 察

1. 歯牙腫の発生時期について

歯牙腫は、発生当初に自覚的にも他覚的にも何ら症状を現わさないことが多いため、正確な発生時期を知ることは不可能である。本症例において



図12 乳犬歯の翻転した歯小囊

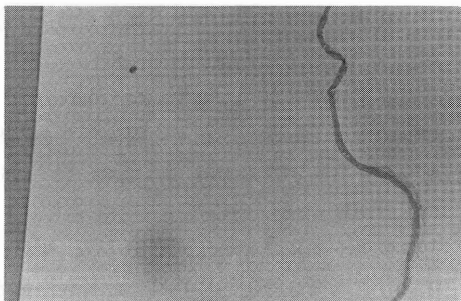


図13 乳犬歯の退縮エナメル上皮

も、乳歯の萌出遅延だけを訴えて来院したのではなく、歯牙腫がある程度発育し、同部に膨隆をきたしてから来院している。

したがって正確な発生時期はとらえにくい、次に述べるように、埋伏していた乳犬歯および乳側切歯の形成時期、萌出時期等から、歯牙腫の発生時期と発育状況を推察することができる。

①乳側切歯の歯冠完成時期は生後2.5～3か月、萌出時期は生後9か月前後である。また、乳犬歯

の歯冠完成時期は生後9か月、萌出時期は生後18か月前後である。

②摘出した乳犬歯、隣在の乳側切歯ともに、歯冠形成は完全で異常は認められなかった。

③乳側切歯には位置異常等認められず、咬合線上に排列しており、萌出に障害を受けていない。一方、乳犬歯は歯牙腫により萌出障害をきたし、完全な埋伏を生じた。

以上の事実から、本症例の歯牙腫は乳側切歯が萌出を始める生後9か月頃から、乳犬歯が通常は萌出を始める生後18か月頃までの間に発生し、乳犬歯の萌出を障害する程度までに発育していたのではないかと考えられる。

上原ら⁸⁾は、6歳男児の右下側切歯部に発生した歯牙腫を発生初期から追跡し、歯牙腫がX線不透過像として認められる以前から、永久側切歯の萌出に障害を与えた可能性を報告している。本症例においても、乳犬歯萌出前の歯牙腫病変がかなり小さなものであったとしても、十分に乳犬歯萌出を障害したであろうと思われる。

2. 歯牙腫の組織発生について

本症例の歯牙腫の発生由来について、大別すると2通りの考え方ができる。乳歯胚由来の上皮組織から発生したという考えと、永久歯胚もしくは永久歯胚へ連なる歯堤上皮組織から発生したという考えである。

歯牙腫の発生時期および位置的關係から、乳歯由来の歯牙腫であろうと推定した報告がいくつかある²⁾³⁾⁷⁾¹⁰⁾¹²⁾¹³⁾。しかしその中で Hitchin ら¹⁰⁾は、乳歯と永久歯は非常に密接しており、発生した歯牙腫が乳歯由来のものか、永久歯由来のものかを区別するのは不可能であると述べており、発生由来の解明は難しい。本症例における歯牙腫の発生由来について、以下に考察する。

まず初めに、乳歯胚由来について考える。本症例の歯牙腫は、発生時期が早いこと、側切歯と犬歯の永久歯胚の形成はX線写真的に正常であること、乳側切歯は形成、萌出ともに正常であること、位置的に埋伏している乳犬歯の近心上方にあること、から考えると乳犬歯由来のものではないかと疑われる。

しかし、摘出物の病理組織学的所見をあわせて歯牙腫の組織発生を考えると、以下にあげる理由から、乳犬歯歯胚上皮由来であるとは考えにくい。

①乳犬歯に形成障害が認められなかった。

②乳犬歯の歯小囊内に残存していた退縮エナメル上皮に病的変化はなく、健全であった。

③摘出した帯状の被膜様軟組織は正常な歯小囊様組織であり、その退縮エナメル上皮も病的な像を示していなかった。この歯小囊様組織は埋伏していた乳犬歯に近接して摘出できたことから、乳犬歯の歯小囊と連続したものであっただろうと思われる。

以上のことから、本症例の歯牙腫は乳歯胚由来ではないかと疑われたが、摘出した乳犬歯由来組織の所見によって乳歯胚由来とは考えにくいことが明らかである。

次に、永久歯胚もしくは歯堤上皮由来について考える。X線写真によると、歯牙腫と永久歯胚はかなり離れた位置関係にあり、永久歯胚に形成異常が認められないことから、永久歯胚の歯小囊内の退縮エナメル上皮から歯牙腫が発生したとは考えられない。したがって本症例の歯牙腫は、乳歯胚から永久歯胚へと連なる代生歯堤上皮から発生したものであろうと考えられる。歯牙腫の位置的關係より、乳側切歯から永久側切歯への代生歯堤上皮、もしくは乳犬歯から永久犬歯への代生歯堤上皮から発生したと考えるのが、最も妥当だと思われる。

本症例のように発生時期が生後9～18か月と推定され、X線写真的にも乳歯近傍に位置する歯牙腫であっても、代生歯堤から発生したのではないかと強く示唆されたことは、真に乳歯由来の歯牙腫はきわめて数少ないことを考えさせる。

結 語

著者らは、4歳男児の上顎左側乳犬歯部に発生した、乳犬歯の萌出障害をきたした集合性歯牙腫を経験し、その発生時期と組織発生について考察した。歯牙腫は、生後9～19か月頃とかなり早い乳幼児期に発生し、病理組織学的所見から永久歯の歯堤上皮より生じたものであろうと推察された。

文 献

- 1) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学. 507-512頁, 永末書店, 京都, 1984.
- 2) 両川辰雄, 甘利英一, 阿部節子, 桜田光子: 集合性歯牙腫の一症例. 小児歯誌, 9: 107-115, 1971.
- 3) 渡辺邦一, 天羽 峻, 村田雄一, 高須 淳, 今井一彦: 乳歯に関係した compound composite odontoma の1例 (抄). 日口外誌, 17: 574-575, 1971.
- 4) 中畑範彦, 金子賢司, 川上裕永, 中村武夫, 渡部正吾, 内堀健二, 田所英之, 井手文雄, 柿沼平八郎, 里吉里美, 国分征二, 東 郁也: 本邦における歯牙腫の臨床病理学的検討—補追—10歳以下の年少者における歯牙腫について. 日大口腔科学, 2: 192-199, 1976.
- 5) 黒柳錦也, 正岡勇記, 松下 茂, 宮 忠昭, 山本義茂, 町田幸雄, 山村武夫: 集合性歯牙腫形成過程のX線学的研究. 歯科学報, 77: 565-571, 1977.
- 6) 佐々木仁弘, 野坂久美子, 甘利英一, 畠山節子: 経年的観察を行った集合性歯牙腫の1症例. 小児歯誌, 16: 137-143, 1978.
- 7) 西岡哲二, 森本忠三, 上中 均, 白数力也, 山田隆造, 古跡孝和: 乳歯に関係したと思われる集合性歯牙腫の1例. 歯科医学, 44: 276-281, 1981.
- 8) 上原智恵子, 登内喜美江, 野田 忠, 福島祥紘: 形成過程を経時的に観察した集合性歯牙腫の1例. 小児歯誌, 22: 698-705, 1984.
- 9) 福田 理, 河田典雄, 山内哲哉, 横井勝美, 黒須一夫: 下顎前歯部歯牙腫摘出後の経過観察. 小児歯誌, 23: 745-752, 1985.
- 10) Hitchin, A. D., Dekonor, E.: Two cases of compound composite odontomes associated with deciduous teeth. Brit. Dent. J., 114: 26-28, 1963.
- 11) Tayar, I.: Radiographic survey of a composite odontoma growth during five years: Report of a case. Dent Pract., 20: 58-59, 1969.

- 12) Hunsuck, E. E. : A midpalatal compound odontoma in an infant. J. oral Surg., 29 : 353-355, 1970.
- 13) Noonan, R. G. : A compound odontoma. J. oral Surg., 32 : 740-742, 1971.